

2004 年度卒業論文へのコメント

後藤 喬 「信用金庫の役割」

この論文は信用金庫の非営利性に着目して、地域経済社会における信用金庫の役割と、信用金庫の展望を論じたものである。

ペイオフの完全実施を控えて、信用金庫の統合再編が進み、他方では地域経済の冷え込みが依然として厳しいなかで、こうしたテーマはまさに時宜を得ていると思う。筆者自身が信用金庫に就職する予定ということもあって、研究対象を他人事として突き放して観察するのではなく、まさに自分自身の問題として捉えており、見方によっては、筆者自身の抱負を語っているようにも感じられる。その意味で、思い入れが良く伝わってくる論文といえる。

この論文のととても良い点を挙げておきたい。

第一は、議論の軸がぶれていないことだ。信用金庫自身の生き残りという視点も強いけれども、信用金庫が地域社会のなかでどのような役割を果たすべきかという視点が全体を通して一貫している。また、4章で引用されている新聞記事の内容は、この論文の議論をうまく支えているし、結論の「人と人とのつながりを作り出していく役割」を説得力あるものにしてきている。

第二は、「はじめに」や補論でも触れられているように、筆者が就職活動を行う過程で問題意識を持ち、信用金庫の関係者とじかに接するなかで得られたヒントが、論文の下敷きになっていることである。4章の内容が、大所高所からの議論ではなく、信用金庫の職員の目線に近いことに、それは示されているのではなかろうか。

他方、この論文に二つほど注文を付けておきたい。

第一に、信用金庫の関係者とじかに接する中で得られたヒントがこの論文の下敷きになっているとしても、それがあまり顕在化していないことである。もちろん、活字にできないマル秘情報も数多くあるだろう。特に企業は最近、情報管理に神経をとがらせている。だが、筆者自身が見聞した事例が論文に盛り込まれていれば、この論文はより説得力を増し、価値が高まったであろう。

第二に、信用金庫をめぐる金融政策や制度の変化についても、視野に入れるとなお良かったと思われる。金融検査マニュアルの適用、ペイオフの完全実施、リレーションシップ・バンキングなどの金融政策は、信用金庫の経営に大きな影響を与えてきたのであり、信用金庫が地域経済の中で望まれる役割を考察するうえで欠かせない要素であろう。

筆者が就職後、日常業務のなかで、卒業論文で懐いた問題意識を持ち続け、発展させていくことを願う。